

第91回学術分科会における委員からの主な意見

【学術の意義・現代的役割】

- AIが言語を使えるようになったこと、さらにはそのほぼすべてのリソースと発展をアメリカの私企業が担っていることは、非常に大きなパラダイムシフトである。これらはブームではなく大きな地殻変動であり、学術にもどのように影響や変化をもたらすのかを踏まえつつ、第7期科学技術・イノベーション基本計画やその手前の施策を考えていく必要があるのではないかな。
- 「学問」という言葉が表す通り、「学び」があって「問い」が生まれるという順序があるため、学びの部分強くしないと良質で深い問いは生まれにくい。そのためにも、学びの支援する基盤的経費や研究環境を充実させることが重要である。また、質の高い問いへの挑戦を、ボトムアップ型の科研費、トップダウン型のJST・AMEDによる競争的研究費によって支援を続ける必要がある。

【研究者の知的好奇心に根差した独創的な研究の後押し】

＜基盤的経費及び競争的研究費について＞

- 中小規模の大学では研究費が少なく、研究が維持できない状況にあるため、運営費交付金などが広く厚く渡らせることが重要。
- デュアルサポートシステムの劣化を前提として科研費の質的・量的な充実を目指すのではなく、基盤的経費を従前どおりに回復、さらには充実させた上で、科研費制度を質・量ともに改善する立場を明示してほしい。
- 研究力を国際的にトップレベルにするためには、科研費をはじめとする研究費を飛躍的に伸ばす必要があると思う。また、定常的な研究開発費が大きく減っていることも、研究力を低下させている大きな原因の一つであるため、定常的な研究開発費が減らないように、教育研究組織改革分や設備等の整備費は別途財源を設けた方がよいと思う。
- 日本以外で大学の運営費交付金に類する予算を減らした台湾において、大学のパフォーマンスが低下したことを受け、再投資を行った結果、大学のパフォーマンスが上向きになったというエビデンスもある。
- 「基盤的経費」対「競争的研究費」という構造に過度にこだわるのがよいことなのか、考える必要がある。例えば、競争性の有無で分けるのではなく、一定の競争性があつたとしても、自由度が高い経費をどのように確保するかなど、複線的な問題設定をすることが必要である。
- 研究開発に対する投資としては、科研費や運営費交付金等の研究者や大学等からのボトムアップ型の研究に対する支援と政策的あるいは目的志向型による研究開発に対する投資があるが、その全体のバランスに関する議論も必要ではないかな。

＜研究活動の国際性、国際的な競争力の向上について＞

- 文科省として国際性を高めた研究を科研費でやりやすくなるように何らかの指針を出してほしい。
- 国際的な共同論文を出していくことで、被引用数などの向上につながるため、日本国内だけではなく、国際的な交流が行われるべきである。
- 日本の大学や研究所は世界から孤立したようなイメージがあることが国際的な共同研究の障壁になっていると思われる。海外からの研究者や学生を受け入れる機会を増やすことを通じて国際化を図ることも大切ではないか。
- 海外にネットワークを広げたり、海外との交流を深めたりするためには、博士課程などの若手時代に海外に行くことが良策の一つであるが、日本では実施例が少ないため、国外の大学で博士を取得したり、ポスドクとして在籍したりすることを支援するような政策があってもよいのではないかと思う。
- 国際的なネットワークを広げていくためには、国際的なイニシアチブを獲得するような旗振り役が必要であり、そのためには独創的な研究を育てることが必要である。
- 国際化の鍵を握るのはネットワークであり、そこに入り込むために、日本としてどのように高等教育や研究環境の整備、人材の雇用や交流等を行うかという戦略を立てた上で投資を行うべき。

＜多様で優れた研究を育てるための方策について＞

- 評価や成果などが短期的に求められる印象があるため、キュリオシティドリブンの研究の後押しとして、成果創出をせかさずに、腰を落ち着けるような長期的な研究を後押ししてほしい。
- 研究計画が高く評価された場合に、研究開始時期に自由度をもたらす等の海外の優れた取組を取り入れることも優れた研究を育てるやり方の一つ。
- 研究者自身のキャリアや研究テーマが画一的になってしまっているが、多様な研究成果に結びつけていくためにも、研究者自身の多様性も必要なのではないか。
- 論文の数で評価するのではなく、自信を持っている研究やその研究論文で評価するというあり方もあるのではないか。

【大学等における研究環境の改善・充実、マネジメント改革】

＜研究時間について＞

- 研究時間がなければ資金があっても研究自体を行えないため、研究時間の減少の原因を徹底的に調査・分析して改善していく必要があるのではないか。
- 様々な仕組みにおいて説明責任を問われることにより、学術の価値を創造する時間が失われていることから、現状の仕組みを棚卸しし、価値創造のために時間を増やす仕組みを作るための意思統一がなされるべきではないかと思う。
- 科研費等の外部資金の申請書作成に多くの時間を割かれている。また、その申請書を査読するのも研究者であり、その負担も大きくなっていることから、科研費のピアレビューの在り方や評価方法の合理化についても深く考える必要がある。

＜大学事務、大学改革について＞

- 海外では機関の運営や事務に特化した教員がいることで、研究者の研究時間を確保できているという事例があるため、日本においてもそのような人材の育成により、研究時間の確保をしていくことも必要ではないかと思う。
- 海外の好事例を導入するために、海外の有力大学の学長経験者等を雇用して、改革を行っていただき、それをモデルケースとして他大学の改革を試みることも考えられるのではないかな。
- 研究に集中できる環境を作るために、事務面での支援人材を長期的に安定して雇用する仕組みが必要である。
- 大学の教育や運営業務に対する教員数の絶対数が足りないために、研究者の時間がとられてしまっていることから、定員を削減せざるを得ないような運営費交付金の状況を見直す、もしくは定員を減らさなくとも済むような努力をする必要があるのではないかな。

＜研究のデジタル化について＞

- 研究のデジタル化による正の効果と負の効果の双方を踏まえ、研究のデジタル戦略についても論じる必要があるのではないかな。

＜好事例の横展開について＞

- グッドプラクティスを他大学にも共有することで、いい取組を他大学にも広げていくという視点も重要である。

【日本全体の研究力発展を牽引する研究大学群の形成】

＜研究大学群の形成について＞

- 研究大学群の構築に当たっては、排他的になるのではなく、国内外の大学とのネットワークを拡充していくよう後押ししていくことも重要。
- 教育や研究の裾野が非常に広いという特徴が日本の大学にはあるので、研究大学群を形成するだけではなく、個々の研究者・大学に資するような形にしてほしい。

＜中規模研究設備について＞

- 中規模研究設備については、「最先端の研究設備」も非常に重要であるが、「汎用性の高い設備」の充実も図るべき。
- 中規模設備の整備は非常に重要であるが、競争力のある研究を生み出すためには、それを支える技術職員の育成と待遇改善を合わせて行うことが必要である。

＜共同利用・共同研究拠点・学際領域展開ハブ形成プログラムについて＞

- 光熱費や物価の高騰、円安などが続く中、すでに支援を始めている共同利用・共同研究拠点や「学際領域展開ハブ形成プログラム」の活動に影響がでないように、責任をもって予算の確保をしていただきたい。

【その他】

＜「博士人材活躍プラン～博士をとろう～」について＞

- 過去に、「21世紀COE」から「グローバルCOE」、「卓越大学院プログラム」等といった博士人材の育成プログラムを文科省で主導されたが、それらがどのような成果につながったのかに注目すべきであり、今後の育成プログラムにもそのような視点を加えてほしい。
- 国際機関は博士人材が能力を発揮できる場である。また、大使館において、その国の科学技術の現状把握や我が国の科学技術の情報発信等で、その能力を発揮できるのではないかと思う。
- 人口100万人当たりの博士号取得者数の比較だけではなく、中国の膨大な人口数などと比較するためにも、博士の取得数の絶対数を見るべき。また、世界において日本の博士人材がどれほど活躍しているかなども見てほしい。
- 博士課程修了者の標準修業年限超過率を出しており、超過しない方がよいという観点で数値が見られているが、博士時代にどのような研究成果を出して、それがその後の研究人生にどのように影響するかを加味するために、海外の有力大学における修業期間との比較を調べた方がよいと思う。

以上